

分配関数，密度行列，古典対応

量子力学ではカノニカル分布の分配関数 Z は，ハミルトニアン H の固有値，固有状態をそれぞれ $\{E_i, |\psi_i\rangle\}$ として

$$Z = \sum_{E_i} G_i e^{-\beta E_i} = \sum_i \langle \psi_i | e^{-\beta H} | \psi_i \rangle = \text{Tr} e^{-\beta H} \quad (1)$$

で与えられる。係数 G_i はエネルギー固有値 E_i が縮退している場合の縮重度（同じ固有値 E_i をもつ独立な状態の数）であるが， $\{|\psi_i\rangle\}$ は，縮退している場合を含めて完全系を構成しているとする。（エネルギー固有値 $\{E_i\}$ の中に「同じ値のものがある」と考えておけばよい。）記号 Tr は行列の対角和（トレース，跡）である。演算子

$$\rho = e^{-\beta H} \quad (2)$$

を，カノニカル分布の密度行列という。この場合，状態は1つの波動関数で表現される純粋状態ではなく，混合状態

$$\rho = \sum_i e^{-\beta E_i} |\psi_i\rangle \langle \psi_i| \quad (3)$$

である。（「雑書庫」[209]）これを用いると，任意の物理量（エルミート行列） Q の平均値は， Q の純粋状態 $|\psi_i\rangle$ における量子力学的期待値を用いて，

$$\langle Q \rangle = \frac{1}{Z} \sum_i \langle \psi_i | Q | \psi_i \rangle e^{-\beta E_i} = \frac{1}{Z} \sum_i \langle \psi_i | Q e^{-\beta H} | \psi_i \rangle = \frac{\text{Tr} Q \rho}{\text{Tr} \rho} \quad (4)$$

で与えられる。エネルギー表示では密度行列は対角行列であるが，状態ベクトルをユニタリ変換して別の完全直交系で表し，非対角行列になっていてもかまわない。行列のトレースはユニタリ変換で不変，すなわち変換行列を U として，トレースの性質「 $\text{Tr} AB = \text{Tr} BA$ 」により

$$\text{Tr} U^\dagger \rho U = \text{Tr} \rho U U^\dagger = \text{Tr} \rho, \quad \text{Tr} U^\dagger Q U \text{Tr} \rho U = \text{Tr} Q \rho U U^\dagger = \text{Tr} Q \rho \quad (5)$$

であるから，分配関数や物理量の平均値は変わらない。

状態をエネルギーの代わりに運動量あるいは座標で表す場合，トレースは p 表示でとるか， q 表示でとるかの二者択一になる。一方，古典統計では，例えば1自由度の場合，位相平面 (p, q) での2重積分で求めた。この対応は，必ずしも自明ではない。

まず，ハミルトニアンを

$$H(q) = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{\partial^2}{\partial q^2} + V(q) \quad (6)$$

として， q 表示での分配関数は変数 q についての積分

$$Z(\beta) = \text{Tr} e^{-\beta H(q)} = \int \langle q | e^{-\beta H} | q \rangle dq \quad (7)$$

で表される。密度行列 $e^{-\beta H}$ の行列要素は，固有関数系による対角行列表示

$$H(q)\psi_n(q) = E_n\psi_n(q), \quad e^{-\beta H(q)} = \sum_n e^{-\beta E_n} |\psi_n\rangle \langle \psi_n| \quad (8)$$

を用いれば，¹

$$\begin{aligned} \langle q' | e^{-\beta H} | q \rangle &= \sum_n e^{-\beta E_n} \langle q' | \psi_n \rangle \langle \psi_n | q \rangle = \sum_n e^{-\beta E_n} \psi_n^*(q') \psi_n(q) \\ &= e^{-\beta H(q)} \sum_n \psi_n^*(q) \psi_n(q') = e^{-\beta H(q)} \delta(q - q') \end{aligned} \quad (9)$$

¹ ブラ，ケットベクトル $\langle \psi_n |, |\psi_n \rangle$ は， q 表示で $\langle \psi_n | = \sum_q \langle q | \psi_n^*(q)$ ， $|\psi_n \rangle = \sum_q \psi_n(q) |q\rangle$ と書ける。

となる。最後の δ 関数は、固有関数系 $\{\psi_n(q)\}$ の完全性の条件

$$\sum_n \psi_n^*(q)\psi_n(q') = \delta(q - q') \quad (10)$$

によるものであるが、ここで対角要素 ($q' = q$) を考えると訳が分からなくなる。この δ 関数をフーリエ変換表示

$$\delta(q - q') = \frac{1}{2\pi} \int e^{ik(q-q')} dk \quad (11)$$

で置き換えた上で、指数関数 $e^{-\beta H}$ を展開し、交換関係

$$\frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial q} e^{ikq} = e^{ikq} \left(k + \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial q} \right) \quad (12)$$

を繰り返し用いれば、

(注 . ここでは $p = \hbar k$ も演算子ではなく c 数)

$$\begin{aligned} \langle q' | e^{-\beta H} | q \rangle &= \frac{1}{2\pi} \int e^{ik(q-q')} \exp \left[-\frac{\beta \hbar^2}{2m} \left(k + \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial q} \right)^2 - \beta V(q) \right] dk \\ &= \frac{1}{2\pi \hbar} \int e^{ip(q-q')/\hbar} \exp \left[-\frac{\beta}{2m} \left(p + \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial q} \right)^2 - \beta V(q) \right] dp \end{aligned} \quad (13)$$

が得られる。ここで初めて対角要素 ($q' = q$) を取り出し、古典近似 ($\hbar \rightarrow 0$) をとれば

$$\langle q | e^{-\beta H} | q \rangle = \frac{1}{h} \int \exp \left[-\beta \left(\frac{p^2}{2m} + V(q) \right) \right] dp \quad (h = 2\pi \hbar) \quad (14)$$

となり、(7) とあわせれば分配関数は

$$Z(\beta) = \frac{1}{h} \iint \exp \left[-\beta \left(\frac{p^2}{2m} + V(q) \right) \right] dpdq \quad (15)$$

と、 p, q についての 2 重積分で表される。

1 粒子の場合は q を $r = (x, y, z)$ に、 p を p にすればよく、位相空間の体積単位は h^3 になる。多体の場合は、 δ 関数の完全性表示に対して、直交関数系として粒子の番号の入れ替えに関して対称化 (Bose 粒子)、または反対称化 (Fermi 粒子) した多体波動関数を用いれば、分配関数の分母、 $h^{3N} N!$ が導かれる。(→ 久保「大学演習熱学・統計力学」p.301)